

保育者・教員志望学生及び現職保育者の 絵本と紙芝居に対する認識に関する調査

伊音星奈*, 湯地宏樹**

本研究は、保育者・教員志望学生と現職保育者を対象として調査を行い、絵本と紙芝居の絵本や紙芝居に対する認識の違いや読み方と演じ方の違いがあるのか。その結果、絵本と紙芝居の歴史や読み方、演じ方については、保育者・教員志望学生よりも現職保育者がよく認識していたが、昔は絵本と紙芝居が子どもに害があるといわれていたことについての認識には違いはみられなかった。しかし、絵本と紙芝居の読み方、演じ方においては、現職保育者は「間」と「子どもとのかかわり」を重視していた。絵本と紙芝居の経験を重ねるなかで、子どもとのかかわりや間の取り方を身につけていくと考えられる。しかし、紙芝居を演じる位置については有意差がみられなかった。保育現場において紙芝居の舞台の使用がされていないことが考えられる。また絵本と紙芝居の読み方と演じ方にはあまり差がないことから、絵本と紙芝居は同じように扱われていることがうかがえる。

【キーワード：絵本，紙芝居，読み方，演じ方】

1. 研究目的

絵本と紙芝居は、どの年齢の子どもにも親しみやすく、集まりなどさまざまな保育場面で多く利用されている。保育現場では、絵本も紙芝居もお話を子どもたちに伝える「紙媒体」として同じように扱われる傾向にあるが、本来、両者は、その成立過程や性質が全く違う(湯地, 2013)。

絵本は平安時代の絵巻物、室町時代の奈良絵本、江戸時代の草双紙に源流がある。現在は、文字なし絵本、仕掛け絵本、物語絵本、生活絵本、観察絵本、科学絵本、保育絵本、絵雑誌など種類も豊富である。絵本の読み方については多くの人が論じている。たとえば、松岡(1987)は、アメリカの有名な児童図書館員のセイヤーズ女史の「お話を語ることは、文学に対して、額縁が絵に対して果たすのと同じ役割をする。」という言葉引用し、「本を読む場合も、肝心なのは絵であって額縁ではないように、大事なものは物語であって読み方ではない。絵にふさわしい額縁が絵の美しさをいっそう引き立たせるように、物語にふさわしい読み方が、物語のおもしろさをいちだんと強める。すなわち、飾り気なく、心をこめて読むのが、いちばんいい読み方である。」と述べている。また梅本(1989)は、「一冊の本を手にして、やさしい声で読むというより、語っている保育者は、

子どもたちの母親的存在になっていく。あくまでも、子どもたちと平等の立場で、いっしょに絵本の世界に入っていくこと。」と述べている。

一方、紙芝居は1930年頃の街頭紙芝居が最初と言われている。教育・保育のための教材として教育紙芝居が刊行されて以来、現在でも保育向けに数多くつくられている。紙芝居は紙人形を舞台上で動かす「立絵」が前身であるように、文字通り「芝居」である。したがって、紙芝居は、読み語るものではなく、演じるものである。演じ手が舞台の下手に立って、子どもたちと交流しながら「演じる」ところに紙芝居のおもしろさがある。紙芝居の「画面をぬく」、「ぬいた画面をさしこむ」、「演じ手と観客が向かい合う」という形式こそが紙芝居の演劇性であり、観る者を魅了する(大元, 2013)。

阿部(2009)は、「絵本の場合、もともと一人で読むということを前提にして作られている。保育の場では、一対一で読み語るのが、本来の姿だと踏まえた上で、集団を対象に見せることが多くある。紙芝居というのは、あくまで芝居として、舞台の上で抜くという動作によって、場面が転換し、物語が進められる。保育の場で見ていると、友だちと一緒に見ることによって、心の中に共感が生まれる。不思議なことに、紙芝居は、一人で見ていて、面白いものではない。」と述べている。このことから考えると、集団生活である保育の場においては、紙芝居のほうが絵本よりも適している面があるのではないだろう

* 徳島県板野郡北島町立北島北幼稚園

** 鳴門教育大学 大学院 基礎・臨床系教育部

か。

そこで本研究は、自分と同じように保育者や教員を目指す学生、また実際に働かされている保育者の方々が絵本と紙芝居についてどのように考え、どのように位置づけているのか、子どもの頃の絵本や紙芝居の経験がどのような思い出として残っているのかということに興味をもった。

本研究では、保育者や教員志望の保育者・教員志望学生と現職保育者を対象として、絵本を読んだ経験と紙芝居を演じた経験、絵本と紙芝居に対する意識、絵本と紙芝居の持ち方、読み方や演じ方などに違いがあるかなど明らかにする。

2. 研究方法

(1) 調査対象

保育者・教員養成系のA大学、B短期大学の学生1年生201名及び現職保育者111名とした。質問項目で保育者志望と教員(小・中・高)志望を振り分けた。

(2) 調査方法

質問紙によるアンケート調査とし、保育者・教員志望学生は、授業時間の中で調査用紙を配布して実施し、回答後に回収した。現職保育者は県教育委員会主催の研修会に各園から代表で参加している保育者に研修会終了後に任意で回答してもらい、その場で回収した。

(3) 調査内容

主な質問項目は以下のとおりである。

- ・子どもの頃、誰に絵本(紙芝居)を読んで(演じて)もらったか。
- ・絵本(紙芝居)を読んだ(演じた)ことはあるか。
- ・絵本(紙芝居)を読む(演じる)とき、最も気を付けなければならないことは何か。
- ・どの位置で絵本(紙芝居)を読む(演じる)か。
- ・絵本と紙芝居はどちらのほうが得意か。
- ・絵本と紙芝居の子どもはどちらが好きだと思うか。

(4) 分析方法

質問紙調査の分析は、IBM SPSS Statistics 23及びエクセル統計2012を用いて行った。

(5) 倫理的配慮

調査の前に研究の目的、プライバシーの保護、研究成果の公表、記入上の注意などを本調査に協力するか否かは自由意志で決定すること、協力しなくても不利益をうけることはないことなど調査用紙の説明文に明記するとともに口頭でも説明した。

3. 結果と考察

3.1 絵本と紙芝居の経験

「【複数回答可】子どもの頃、誰に絵本を読んでもらいましたか」と尋ねたところ、どの所属においても、子どもの頃に絵本を読んでくれたのは先生や親の割合が高かった(図1)。

χ^2 検定を行ったところ、先生($\chi^2 = 8.73, df = 2, p < .05$)、祖父母($\chi^2 = 6.08, df = 2, p < .05$)、ボランティア($\chi^2 = 53.63, df = 2, p < .01$)において有意差がみられた。残差分析を行ったところ、先生では保育者志望学生(調整済み残差=2.7)が期待値より有意に高く、現職保育者(調整済み残差=-2.3)は有意に低かった。祖父母では保育者志望学生(調整済み残差=2.3)、ボランティアでは保育者志望学生(調整済み残差=2.5)と教員志望学生(調整済み残差=5.1)が期待値より有意に高く、現職保育者(調整済み残差=-7.7)は有意に低かった。親では有意差はみられなかった。

「【複数回答可】子どもの頃、誰に紙芝居を演じてもらいましたか」と尋ねたところ、どの所属においても先生の割合が最も高かった(図2)。

χ^2 検定を行ったところ、先生($\chi^2 = 9.92, df = 2, p < .01$)、親($\chi^2 = 7.30, df = 2, p < .05$)、ボランティア($\chi^2 = 16.43, df = 2, p < .01$)に有意差がみられた。残差分析を行ったところ、先生では教員志望

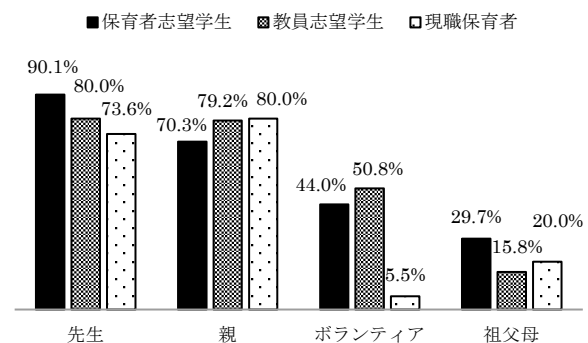


図1 子どもの頃の絵本経験

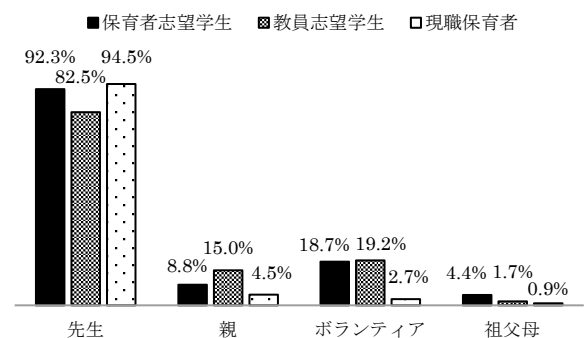


図2 子どもの頃の紙芝居経験

学生(調整済み残差= -3.1)が期待値より有意に低く、現職保育者(調整済み残差= 2.2)が有意に高かった。親では教員志望学生(調整済み残差= 2.5)が期待値より有意に高く、現職保育者(調整済み残差= -2.2)が有意に低く、ボランティアでも教員志望学生(調整済み残差= 2.3)が期待値より有意に高く、現職保育者(調整済み残差= -4.1)が有意に低かった。

以上の結果から、絵本は学校や家庭でも広く読まれているのに対して、紙芝居は家庭よりも幼稚園や保育所など集団生活の場で演じられることが多い。その理由として、一般家庭では紙芝居よりも絵本のほうが入手しやすいこと、身近なものという認識があるからだろう。紙芝居は本来芝居であり、複数の聞き手を対象としているからである。

子どもの頃の絵本と紙芝居の経験は先生の割合が高い。つまり、先生から絵本や紙芝居を与えられる影響は大きい。保育者・教員志望学生と現職保育者と違いは世代間の差だと思われる。保育者・教員志望学生たちは半数近くがボランティアから絵本を読んでもらった経験があるが、現職保育者は 5.5%に留まっていた。2001 年「子どもの読書活動の推進に関する法律」が施行されて以来、「子どもの読書活動推進計画」に基づき、家庭・地域・学校の連携による子どもの読書活動が推進され、読み聞かせボランティア団体などの活動も活発になったと考えられる。

「あなたは、今までに子どもの前で絵本を読んだことはありますか」と子どもの前で絵本を読んだ経験について尋ねた。保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の間に差があるかどうか、 χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 256.93, df = 6, p < .01$)。この結果と残差分析の結果をみると、絵本を読んだ経験が「10 回以上」あるのは、保育者志望(13.2%)、教員志望(9.2%)が期待値よりも有意に低く、現職保育者(99.1%)が期待値よりも有意に高かった(表 1)。保育者志望学生は子どもに絵本を読んだ経験が「4, 5 回以上ある」(20.9%)と期待値より有意に高く、教員志望学生は「一度もない」(29.2%)が期待値より有意に高かった。子どもの前で絵本を読んだ経験があるのは教員志望学生よりも保育者志望学生の方が多いといえる。

「あなたは、今までに子どもの前で紙芝居を演じたことはありますか」と子どもの前で紙芝居を演じた経験について尋ねた。保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の間で紙芝居を演じた経験に差があるかどうか、 χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 304.10, df = 6, p < .01$)。残差分析の結果をみると、紙芝居を演じた経験が「10 回以上」あるのは、保育者志望学生と教員志望学生(0.0%)は期待値より

表 1 子どもに絵本を読んだ経験

	一度もない	数回ある	4, 5 回以上	10 回以上
保育者志望学生	9	51	19	12
	9.9%	56.0%	20.9%	13.2%
教員志望学生	-1.3	4.7**	4.9**	-6.4**
	35	65	9	11
現職保育者	29.2%	54.2%	7.5%	9.2%
	6.0**	5.2**	- .6	-9.0**
現職保育者	1	0	0	109
	0.9%	0.0%	0.0%	99.1%
	-4.9**	-9.7**	-4.0**	15.2**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表 2 子どもに紙芝居を演じた経験

	一度もない	数回ある	4, 5 回以上	10 回以上
保育者志望学生	51	35	5	0
	56.0%	38.5%	5.5%	0.0%
教員志望学生	4.0**	3.5**	1.5	-7.9**
	72	43	4	0
現職保育者	60.5%	36.1%	3.4%	0.0%
	6.1**	3.5**	.2	-9.7**
現職保育者	1	2	1	106
	0.9%	1.8%	0.9%	96.4%
	-10.1**	-6.9**	-1.6	17.4**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

有意に低かったのに対し、現職保育者(96.4%)は期待値よりも有意に高かった(表 2)。紙芝居を演じた経験が一度もないのは、保育者志望学生(56.0%)、教員志望学生(60.5%)と期待値よりも有意に高かった。保育者・教員志望学生が紙芝居を演じた機会は、あまりないと考えられる。

3.2 絵本と紙芝居の読み方、演じ方

「絵本で最も気を付けなければならないことは次のうちどれだと思いますか」と尋ねた項目について、保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の間で差があるかどうか、 χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 39.93, df = 8, p < .01$)。残差分析の結果をみると、絵本を読むときに最も気を付けることは「間の取り方」と答えたのは教員志望学生(8.5%)が期待値よりも有意に低く、現職保育者(31.4%)は期待値よりも有意に高かった(表 3)。保育者志望学生は 12.1%であった。藤本(2015)は、「『間』を上手に置き、生かすことが大切なのです。ですから、絵本を楽しむには、ページとページの間いかに間をおいて読むか、流れるリズムをどうつなぐか、その場面転換をうまく伝えるように読むことが大切です。

うまくめくれば、作者の意図した驚きや意外性がきちんと伝わります。」と、間の重要性を述べている。「子どものかかわり」と答えた現職保育者(31.4%)は期待値より有意に高かった。さらに、「声色に変化をつける」と考えているのは教員志望学生(31.4%)が期待値より有意に高く、現職保育者(9.8%)は期待値より有意に低かった。松岡(1987)は、「わたしは、何も、感情を出した読み方がいけないとか、棒読みがいいとか言っているのではありません。しかし、読み手から自然に流れ出てくる以上に、何か技巧をこらして読もうとすることは(中略)かえってお話を損なうことになると言いたいのです(中略)ほんとうにいい読み方というのは、読み終わったとき、物語の世界が、聞いた子の心に残る読み方をいうのだと思います。」と述べている。

以上のことから、現職保育者は、保育の中で絵本を読む経験を重ねるなかで、子どもたちの反応や表情などから、間をうまく取ったり、子どもとかかわったりすることのほうが重要だと感じているのではないだろうか。

「紙芝居で最も気を付けなければならないことは次のうちどれだと思いますか」と尋ねた項目について、保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の間で紙芝居を演じるときに最も気を付けることについての考えに差があるかどうか、 χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 49.19, df = 8, p < .01$)。残差分析の結果をみると、紙芝居を演じるときに最も気を付けることでは、保育者志望学生は「声の大きさ」(21.1%)、教員志望学生は「スピード」(24.2%)、「声色に変化をつける」(38.3%)、現職保育者は「間の取り方」(39.6%)、「子どものかかわり」(21.7%)が期待値より有意に高かった(表4)。保育者志望学生は「子どものかかわり」(5.6%)、教員志望学生は「間の取り方」(13.3%)、「スピード」(12.3%)、「声の大きさ」(3.8%)が期待値より有意に低かった。

紙芝居の演じ方の基本とされるのが、「声・間・ぬき」の3つである。「声」に関しては、登場人物の気持ちや状況を理解し、それが伝わるようにすることが重要である。また「間」は、場面転換のときや、観客に期待をもたせるとき、余韻を残すときなどに効果的である。そして「ぬき」は、途中までぬいて止める、ゆっくりぬくなど様々な方法があり、それらを使い分けることにより演出の効果を高めることができる(右手, 2015)。現職保育者は、紙芝居を演じる経験を重ねる中で、子どもが楽しむためには、間をうまく取って演出の効果を高めたり、表現の幅を広げたりすることが重要であると実感してい

表3 絵本を読むときに最も気を付けること

	スピード	声色の変化	間の取り方	声の大きさ	子どものかかわり
保育者志望学生	28	24	11	10	18
	30.8%	26.4%	12.1%	11.0%	19.8%
	0.5	1.0	-1.5	1.2	-0.9
教員志望学生	38	37	10	11	22
	32.2%	31.4%	8.5%	9.3%	18.6%
	1.0	2.8**	-3.1**	0.7	-1.5
現職保育者	24	10	32	4	32
	23.5%	9.8%	31.4%	3.9%	31.4%
	-1.5	-3.8**	4.7**	-1.9	2.4**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表4 紙芝居を演じるときに最も気を付けること

	スピード	声色の変化	間の取り方	声の大きさ	子どものかかわり
保育者志望学生	17	29	20	19	5
	18.9%	32.2%	22.2%	21.1%	5.6%
	0.1	0.2	-0.6	4.1**	-3.0**
教員志望学生	29	46	16	9	20
	24.2%	38.3%	13.3%	7.5%	16.7%
	2.0*	2.1*	-3.7**	-1.2	0.6
現職保育者	13	24	42	4	23
	12.3%	22.6%	39.6%	3.8%	21.7%
	-2.1*	-2.4*	4.4**	-2.7**	2.3*

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

るのではないだろうか。

現職保育者は、たとえば「声色に変化をつける」を比較すると、絵本 9.8%に対し、紙芝居は 22.6%となっているように、絵本と紙芝居で読み方・演じ方の重さの置き方を変えているように思われる。

絵本の読み方と紙芝居の演じ方のクロス集計表(表5)をみると、絵本も紙芝居の両方とも「子どものかかわり」を選んでいる人は45名、「間の取り方」40名、「スピード」34名、「声色の変化」28名いた。絵本の読み方、紙芝居の演じ方のポイントは類似していると思われる。

表5のクロス集計表から、絵本の読み方と紙芝居の演じ方の関係をコレスポネンズ分析によって散布図に示した(図3)。第4軸まで抽出されたが、累積寄与率が76.6%の第2軸までを採用した。図3の第1軸(横軸)は、読み手(演じ手)中心か聞き手中心かという軸を表している。すなわち、横軸のマイナスの方向は聞き手である「子どものかかわり」を重視した読み方・演じ方である一方、プラスの方向は読み手側の「声色に変化をつける」、「声の大きさ」、

表 5 絵本の読み方・紙芝居を演じ方

紙芝居	絵本	スピード	声色の変化	間の取り方	声の大きさ	子どものかかわり
スピード	34	6	8	2	7	
声色の変化	14	28	13	5	16	
間の取り方	2	4	40	1	1	
声の大きさ	13	2	1	13	3	
子どものかかわり	26	12	10	5	45	

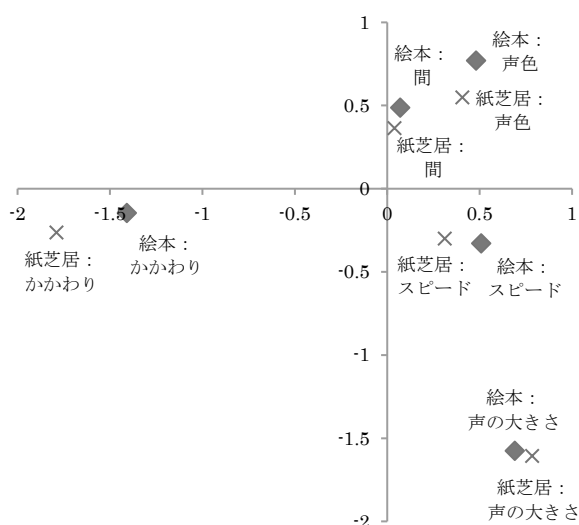


図 3 読み方・演じ方のコレスポネンス分析

「スピード」の読み方・演じ方を重視している。「間の取り方」はその中間に位置している。第 2 軸(縦軸)は、「声色に変化をつける」, 「間の取り方」がプラス方向で、その反対方向に「スピード」, 「声の大きさ」など読み方・演じ方の工夫という軸であると解釈できる。図を俯瞰してみると、絵本の読み方と紙芝居の演じ方では、同じところに気を付けている可能性がある。すなわち、絵本で「間の取り方」に気を付けている人は紙芝居も「間の取り方」を重視している。絵本の読み方と紙芝居の演じ方の工夫よりも「子どものかかわり」を重視するグループもある。これは、子どもの前で絵本を読んだり紙芝居を演じたりしている人がもつ現場感覚だろう。

3.3 絵本の持ち方と紙芝居の位置

「どの位置で絵本を持って読むほうがいいと思いますか」と保育者志望学生, 教員志望学生, 現職保育者の間で読むときの絵本を持つ位置に差があるかどうか, χ^2 検定を行ったところ有意の傾向が見られた($\chi^2 = 11.56, df = 6, p < .01$)。残差分析の結果を

みると、絵本を「絵本の後ろ(正面)」で持つと考えている教員志望学生は 10.8%, 保育者志望学生は 5.5%, 現職保育者は 2.8%であった(表 6)。保育者志望学生, 教員志望学生, 現職保育者すべての所属において、持つ位置は絵本によって変わると考えている割合が多かった。教員志望学生(34.2%)は期待値より有意に低く、現職保育者(52.3%)が期待値より有意に高いことが示された。保育者志望学生は 41.8%であった。一般に縦書き, 左開きの本は右側, 横書きで右開きの本は左側に持つと読みやすいといわれている。絵本のページをめくる方向や絵本の大きさなどの形状によって持つ位置を変える学生や保育者が多いと考えられる。

紙芝居を演じるときの位置はどうだろうか。「どの位置で紙芝居を演じるほうがいいと思いますか。」と尋ねた。保育者志望学生, 教員志望学生, 現職保育者の間で紙芝居を演じるときの位置に差があるかどうか, χ^2 検定を行ったところ有意差はなかった($\chi^2 = 10.61, df = 6, n.s.$)。保育者志望学生 65.9%, 教員志望学生 59.2%, 現職保育者 75.5%と「紙芝居の後ろ(正面)」であると考えている割合が多かった(表 7)。紙芝居の裏側に台詞や演じ方が書かれている紙芝居の絵は、舞台を使って効果が出るように描かれている(長野, 2013)。舞台は、右側からしか絵が取り出せない構造になっている。したがって、演じる位置は必然的に「紙芝居の右側」になるはずである。しかし、現職保育者でも「紙芝居の右側」と答えた割合 8.2%と少なかった。保育現場において舞台の使用があまりされていないのではないかと考えられる。また、学生も紙芝居の後ろ(正面)に立つと考えている割合が多いことから、紙芝居の演じ方についての指導があまりなされていないと考えられるのではないだろうか。

絵本を持つ位置と紙芝居の演じる位置のクロス集計(表 8)をみると、紙芝居の舞台を使って演じれば本来の位置である「紙芝居の右側」と絵本によって持つ位置が変わる「絵本による」との組み合わせは 10 名のみであった。舞台を使わずに「紙芝居の正面」で演じる人が多かったために、「紙芝居の正面」と「絵本の右側」が 72 名と最も多く、次いで「紙芝居の正面」と「絵本による」とが 70 名、「紙芝居の正面」と「絵本の左側」が 58 名と多かった。「絵本による」と「紙芝居による」も 49 名であった。

絵本を持つ位置と紙芝居の演じる位置の関係をコレスポネンス分析によって散布図に示した(図 4)。第 3 軸まで抽出されたが、累積寄与率が 99.6%の第 2 軸までを採用した。第 1 軸(横軸)は、プラスの方向が「絵本による」, 「紙芝居による」など臨機応変

表 6 絵本を持つ位置

	絵本の 右側	絵本の 正面	絵本の 左側	絵本に よる
保育者 志望 学生	27	5	21	38
	29.7%	5.5%	23.1%	41.8%
	0.5	-0.5	-0.1	-0.2
教員 志望 学生	36	13	30	41
	30.0%	10.8%	25.0%	34.2%
	0.7	2.4*	0.6	-2.3*
現職 保育者	25	3	23	56
	23.4%	2.8%	21.5%	52.3%
	-1.2	-1.9	-0.5	2.5*

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表 7 紙芝居を演じる位置

	紙芝居の 右側	紙芝居の 正面	紙芝居の 左側	紙芝居に よる
保育者 志望 学生	5	60	6	20
	5.5%	65.9%	6.6%	22.0%
	-1.5	-0.2	0.2	1.2
教員 志望 学生	16	71	10	23
	13.3%	59.2%	8.3%	19.2%
	1.9	-2.2*	1.2	.5
現職 保育者	9	83	4	14
	8.2%	75.5%	3.6%	12.7%
	-0.5	2.4*	-1.4	-1.7

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

であるのに対して、マイナスの方向は、右側，左側などが固定していることを表している。「絵本の正面」「紙芝居の正面」，「紙芝居の右側」は中間になっている。第 2 軸（縦軸）は，プラスの方向が紙芝居の左側，マイナスの方向が右側という軸を表している。「絵本による」，「紙芝居による」，「紙芝居の正面」などはその中間になる。図を俯瞰すると，持ち方が「絵本による」という人は紙芝居の位置も「紙芝居による」傾向にある。「絵本の左側」と「紙芝居の左側」，「絵本の正面」と「紙芝居の正面」，「絵本の右側」と「紙芝居の右側」も距離は近いといえる。これは，利き手など決まった方向の方が読みやすいという人もいるからだと考えられる。

3.4 絵本と紙芝居の得意

「あなたは，絵本と紙芝居のどちらを使うほうが得意ですか」と尋ね，「絵本」，「どちらかといえば絵本」，「どちらかといえば紙芝居」，「紙芝居」から 1 つを回答してもらった。自分の得意とする割合について，保育者志望学生，教員志望学生，現職保育者で差があるかどうか， χ^2 検定を行ったところ

表 8 絵本を持つ位置と紙芝居を演じる位置

紙芝居 絵本	絵本の 右側	絵本の 正面	絵本の 左側	絵本に よる
紙芝居 の右側	13	4	3	10
紙芝居 の正面	72	14	58	70
紙芝居 の左側	2	0	12	6
紙芝居 による	4	3	1	49

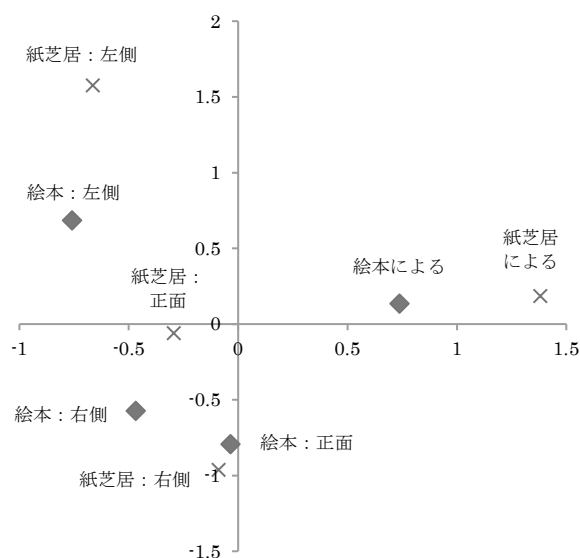


図 4 持ち方と位置のコレスポネンス分析

有意であった ($\chi^2 = 15.68, df = 2, p < .01$)。期待度数が 5 未満のセルが複数あったので「絵本」，「どちらかといえば絵本」を 1 つにまとめるなど 4 段階を 2 段階にした。すべての所属において，紙芝居よりも絵本を得意とする割合の方が多かった (表 9)。絵本のほうが紙芝居よりも身近なものとして認識されているからかもしれない。残差分析の結果をみると，教員志望学生は絵本が得意 73.1%と期待値より有意に低く，紙芝居 26.9%が有意に高かった。現職保育者は反対に絵本が得意 92.7%と期待値より有意に高かったが，紙芝居は得意が 7.3%と期待値より有意に低かった。紙芝居を演じるには「声・間・ぬき」の技術が必要になるため，絵本よりも得意と考える割合が少ないと考えているからではないだろうか。

「子どもは絵本と紙芝居のどちらのほうが好きだと思いますか」と尋ね，「絵本」，「どちらかといえば絵本」，「どちらかといえば紙芝居」，「紙芝居」から 1 つを回答してもらった。「絵本」，「どちらかといえば絵本」は 1 つにまとめた。保育者志望学生，教員志望学生，現職保育者で差があるかどうか， χ^2 検定を行ったところ有意であった ($\chi^2 =$

表 9 絵本と紙芝居はどちらが得意か

	絵本	紙芝居
保育者 志望 学生	77	14
	84.6%	15.4%
	0.5	-0.5
教員 志望 学生	87	32
	73.1%	26.9%
	-3.7**	3.7**
現職 保育者	101	8
	92.7%	7.3%
	3.3**	-3.3**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表 10 子どもは絵本と紙芝居のどちらが好きか

	絵本	紙芝居
保育者 志望 学生	58	33
	63.7%	36.3%
	0.0	0.0
教員 志望 学生	59	59
	50.0%	50.0%
	-3.9**	3.9**
現職 保育者	84	22
	79.2%	20.8%
	4.1**	-4.1**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

20.68, $df = 2, p < .01$ ）。保育者志望学生，現職保育者においては，紙芝居よりも絵本と回答した割合が多かった(表 10)。残差分析の結果をみると，教員志望学生はいずれも 50.0%で絵本は期待値より有意に低く，紙芝居は期待値より有意に高かった。現職保育者は反対に絵本が得意 79.2%と期待値より有意に高かったが，紙芝居は得意が 20.8%と期待値より有意に低かった。子どもが紙芝居を好きだと思っていながらも，自分はそれを演じることが得意でないと考えている人もいると考えられる。

3.5 絵本と紙芝居についての認識

「絵本と紙芝居は，同じ紙媒体でも，歴史が違う」と言われています。あなたは，そのことをご存知でしたか」と尋ね，「はじめて知った」「聞いたことがある」「よく知っている」の 3 段階で回答を求めた。保育者志望学生，教員志望学生，現職保育者の間で差があるかどうか， χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 38.55, df = 2, p < .01$)。絵本と紙芝居の歴史の違いを知っているかどうか，期待度数が 5 未満のセルが複数あったので「聞いたことがある」「よく知っている」を 1 つにまとめた。残差分析の

表 11 絵本と紙芝居の歴史認識

	はじめて知った	聞いたことがある よく知っている
保育者 志望 学生	81	10
	89.0%	11.0%
	3.4**	-3.4**
教員 志望 学生	100	17
	85.5%	14.5%
	2.9**	-2.9**
現職 保育者	61	48
	56.0%	44.0%
	-6.2**	6.2**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表 12 絵本と紙芝居の読み方・演じ方の違いの認識

	はじめて知った	聞いたことがある よく知っている
保育者 志望 学生	59	32
	64.8%	35.2%
	-0.5	0.5
教員 志望 学生	91	26
	77.8%	22.2%
	3.1**	-3.1**
現職 保育者	62	46
	57.4%	42.6%
	-2.6**	2.6**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

結果をみると，歴史が違うということ「聞いたことがある・よく知っている」のは保育者志望学生，教員志望学生はそれぞれ 11.0%，14.5%で期待値より有意に低く，現職保育者 44.0%は期待値より有意に高かった(表 11)。現職保育者は保育者志望学生や教員志望学生よりも絵本と紙芝居の歴史の違いを知っているといえる。

「紙芝居は文字通り「芝居」というように「演じる」ものだから，絵本の読み聞かせとは違う」と言われています。あなたは，そのことをご存知でしたか」と尋ね，「はじめて知った」「聞いたことがある」「よく知っている」の 3 段階で回答を求めた。保育者志望学生，教員志望学生，現職保育者の間で差があるかどうか， χ^2 検定を行ったところ有意であった($\chi^2 = 10.85, df = 2, p < .01$)。残差分析の結果をみると，「聞いたことがある・よく知っている」と答えたのは，教員志望学生 22.2%は期待値より有意に低く，現職保育者 42.6%は期待値より有意に高かった(表 12)。保育者志望学生は「聞いたことがある・よく知っている」と答えたのは 35.2%であった。

このことから、現職保育者は教員志望学生よりも、紙芝居は「演じる」ものであるということを経験的にも知っているということがいえる。

「昔は、『絵本も紙芝居も、子どもに害がある』と言われていました。あなたは、そのことをご存知でしたか」と尋ね、「はじめて知った」、「聞いたことがある」、「よく知っている」の3段階で回答を求めた。保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の間で差があるかどうか、 χ^2 検定を行ったところ有意差はなかった($\chi^2 = 1.66, df = 2, n.s.$)。この結果みると、保育者志望学生、教員志望学生、現職保育者の多くが「はじめて知った」と回答していた(表13)。かつて絵本と紙芝居の悪影響があるといわれていたことはあまり認識しておらず、子どもの成長にとって良いものと認識していると考えられる。

以上、絵本と紙芝居の歴史認識や絵本と紙芝居の読み方・演じ方の違いの認識の違いが、これまでみてきた「3.2 絵本と紙芝居の読み方、演じ方」や「3.3 絵本の持ち方と紙芝居の位置」にも影響していると考えられる。そこで、絵本と紙芝居の歴史認識の違いや読み方・演じ方の違いによって回答に差がみられるかどうかをクロス集計によって検討した。所属の間で差がみられたので現職保育者のみを対象とした。その結果、表14のとおり、歴史認識の違いによる紙芝居を演じるときに最も気を付けていることにのみ有意であった($\chi^2 = 20.68, df = 2, p < .01$)。残差分析の結果をみると、「子どものかかわり」において「はじめて知った」群は11.9%と期待値より有意に低く、「聞いたことがある・よく知っている」群は34.0%と期待値より有意に高かった。紙芝居の歴史的成立過程の認識の違いが演じる際の重視の要点が影響しているのかもしれない。

4. 本研究のまとめと今後の課題

絵本や紙芝居を子どもの前で数多く読み語ったり演じたりしている現職保育者と、比較的経験の少ない学生とを比較すると、それらの認識の違いが見られる部分と、見られない部分とがあった。子どもの頃の絵本と紙芝居経験に関しては、学生も現職保育者も、子どもの頃絵本を読んでもくれたのは親と先生、紙芝居を演じてくれたのは先生の割合が高かった。どの世代においても、絵本は家庭や保育現場において親しまれてきたと考えられる。

絵本と紙芝居の認識においては、絵本と紙芝居の歴史の違いや読み方や演じ方の違いについては、学生よりも現職保育者のほうが知っていたが、絵本と紙芝居が子どもに害があるといわれていたことについての認識には違いがあまりみられなかった。絵本

表13 絵本と紙芝居の悪影響の認識

	はじめて知った	聞いたことがある よく知っている
保育者 志望 学生	84	7
	92.3%	7.7%
	-0.8	0.8
教員 志望 学生	109	8
	93.2%	6.8%
	-0.5	0.5
現職 保育者	105	4
	96.3%	3.7%
	1.3	-1.3

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

表14 紙芝居を演じるときに最も気を付けること
(現職保育者のみ)

	スピード	声色の 変化	間の 取り方	声の 大きさ	子どもとの かかわり
歴史認識 はじめて 知った	7	16	25	4	7
	11.9%	27.1%	42.4%	6.8%	11.9%
	-0.1	1.2	0.6	1.8	-2.8**
歴史認識 聞いたこ とがある よく知っ ている	6	8	17	0	16
	12.8%	17.0%	36.2%	0.0%	34.0%
	0.1	-1.2	-0.6	-1.8	2.8**

上段：人数，中段：人数の割合，下段：調整済み残差
残差分析：** $p < .01$ ，* $p < .05$

の害については倉橋惣三(1965)でさえ「感情にしみ込んで、つきものようになる」「ほしいままの空想性によって、心を現実から奪いさらってゆく」と述べている。街頭紙芝居は戦後の1948年から1949年にかけて最盛期を迎えるが、子どもに悪影響を及ぼすものとして、教育上の批判が高まり、新聞上にも取り上げられるようになる(鬘櫛・種市, 2005)。今や絵本や紙芝居は保育に不可欠であるので害だという保育者は少ないだろう。

絵本と紙芝居を比べると、学生は紙芝居よりも絵本の経験が多く、それを身近なものとして位置づけていることが考えられるのではないだろうか。絵本を読み語るときと紙芝居を演じるときに気を付けることについて、現職保育者は「間」を重視している。絵本と紙芝居の経験を重ねるなかで、間の取り方を身につけていくのだろう。しかし、絵本を持つ位置や紙芝居を演じる立ち位置については有意差があまり見られなかった。このことから、学生の頃にあまり指導されないこと、保育現場において紙芝居の舞台の使用があまりされていないことが考えられるだろ

う。プロによる紙芝居の実演を見ると、演技手は、観客に質問をしたり、台詞を一緒に言うよう促したりしながら、登場人物や場面に応じて声色や声の大きさを変化させ観客を魅了していた。改めて、絵本の読み語りとの違いを感じさせる。

本研究では、学生と現職保育者との認識の違いに着目した。今後は絵本を読んだり紙芝居を演じたりした経験が絵本や紙芝居の認識に関係しているのかということについても研究したいと考えている。また、現職保育者や街頭紙芝居のプロの人たちにインタビュー調査など質的な分析をとおして、絵本や紙芝居の読み方、演技方の違いを明らかにしていきたい。

最も大切なことは、絵本と紙芝居の違いを見出すことではなく、子どもがお話を楽しむことを追求することにあると考える。子どもにとっては、絵本や紙芝居などを区別して見たり聞いたりしているわけではない。しかし、それぞれの良さを伝えるためには、保育者が絵本や紙芝居の特徴を把握し、良さを引き出す方法を身につける必要があるのではないだろうか。そうした意味でも、本研究で、絵本は「読み語る」もの、紙芝居は「演じる」ものという認識ができたのは大きい。

平成29年告示の幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容の取り扱いで「絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること」があらたに加わった。幼稚園現場では、実際に絵本や紙芝居を子どもの前で読んだり、演じたりする機会が多くある。それらの練習時間を十分に確保するのは難しいが、子どもたちにお話を届けるために努力していきたい。

謝辞

本研究は、2016年度鳴門教育大学卒業論文「絵本と紙芝居に対する認識の違いに関する研究」(伊音星

奈)の一部を再分析し、加筆修正したものである。鳴門教育大学幼年発達支援コースの先生方には、貴重なご助言をいただいた。本調査は、現職保育者、教員や保育者を目指されている学生の方々に協力をいただいた。本論文の投稿のためにご支援いただいた徳島県板野郡北島町立北島北幼稚園園長をはじめ、先生方にも心からお礼申し上げたい。

引用・参考文献

- 阿部明子(2009) 絵本の力, 子どもの文化 2009年4月, 子どもの文化研究所, pp. 30-34.
- 梅本妙子(1989) ほんとの読み聞かせしてませんか えほんとはいく, エイデル研究所.
- 大元千種(2013) 保育現場における紙芝居の活用の課題—保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして—, 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要, 第8号, pp. 177-188.
- 倉橋惣三(1965) 倉橋惣三選集第三巻, フレーベル館.
- 鬢楠久美子・種市淳子(2005) 保育におけるメディアとしての紙芝居—紙芝居通史を中心に—, 名古屋柳城短期大学研究紀要, 第27号, pp. 53-67.
- 長野ヒデ子編(2013) 演じてみようつくってみよう紙芝居, 石風社.
- 藤本朝巳(2015) 子どもと絵本 絵本のしくみと楽しみ方, 人文書院.
- まついのりこ(2006) 紙芝居の演技方Q&A, 童心社.
- 松岡享子(1987) えほんのせかい こどものせかい, 日本エディタースクール出版部.
- 松岡享子(1994) たのしいお話 お話を子どもに, 日本エディタースクール出版部.
- 右手和子(2015) 心に届く, 紙芝居の演技方;子どもの文化研究所編, 紙芝居 演技方のコツと基礎理論のテキスト, pp. 3-78.
- 湯地宏樹(2013) 絵本, 紙芝居;小田豊・山崎晃監修 幼児学用語集, 北大路書房, p. 133.